**新米冒険者胃胎肛産口姦記**

**フィアナ・サーシスの最初で最後の冒険記録　体験版**

　･･････「ダンジョン」という言葉がある。この言葉はもともと、城塞の地下牢や監獄を指す言葉であったが、トリギスティリアにおける冒険者産業が発展すると、魔物の棲み家や未開の洞窟、廃墟と化した古代遺跡などを指す言葉として用いられるようになる。すなわち、ひと言で「危険な場所」とわかる言葉として重宝されたのだ。

　数多くあるダンジョンでもっとも有名な場所は、ランバース帝国北東部にある「地下大迷宮」だろう。地下世界への侵攻の拠点として古代カロン帝国が建設したと噂されるダンジョンであり、その規模の広大であること、いまも全容が把握できていない。このダンジョンは少なく見積もっても三〇〇〇年以上昔からあるとされており、世界でもっとも古い人工ダンジョンとして冒険者の間では有名だった。

　では、もっとも新しいダンジョンはどこかと問われれば、多くの冒険者が「ベーゼッタ研究所跡地」と答えるだろう。

　ベーゼッタ研究所跡地とは、ベルザニア連合国の一角を成すアズニハン王国北部にある廃墟のことで、この場所では、かつて魔導や錬金術を用いた「戦争用人造生物」の研究と開発がおこなわれていた。

　研究所では戦闘用ホムンクルスや植物由来のゴーレム、人間や魔物の交配種の作成など、倫理や道徳を無視した研究と実験が昼夜を問わずおこなわれ、数多の「かわいそう」な生き物たちが生み出されていたのであった。

　研究所で生成された人造生物のなかで特に傑作と称されたのが「ゼルギウスの繁殖獣」と呼ばれる練成生物であった。それは体長が三メーストル（一メーストル、一・五メートル）もある大型の獣人形態の魔獣で、単眼で、オーガのように太い腕が四本生えており、全身に生えた濃い体毛には完全魔法耐性があった。作成者の名を冠するこの魔導生物は、人間の受精卵に多数の魔物の因子を注入して作成された合成獣であり、その高い戦闘力もさることながら、保有する特異能力が生物兵器として高く評価されたのである。

　ゼルギウスの繁殖獣が持つ特異能力とは、人間の女性を孕ませるというものであった。それだけ聞くと普通のこと（魔物や魔獣が人間の女性を妊娠させたという事例は決して珍しいことではない）と思われるかもしれないが、ゼルギウスの繁殖獣が生成する精子は、それ自体が「完全授精体」としての機能を有しており、子宮ではなく、なんと「胃」の中で育つという特異な存在なのであった。ゼルギウスの繁殖獣の精子を基に育つ魔物は完全にランダムであったが、一度に数種類の魔物を産ませることが可能で、この繁殖獣一体を放つだけで敵国に大規模な「生物災害」を発生させることが可能であった。

繁殖獣の標的とされた女性は口姦されて胃の中で魔物を孕んだ挙げ句、口や肛門から魔物の幼体を産み落とすという地獄を味わうことになるのだが、このおぞましき人造生物の最初の犠牲者となったのは、作成者ゼルギウスの娘オリビアであった。

　オリビアは父親の手で繁殖獣の元へと送り込まれると、大勢の研究者たちが見ている目の前で口姦を受け、大量射精によって尻から大量の白濁液をヒリ出しながら胃袋で妊娠した。ピロリ菌のごとく胃壁に着床することに成功した精子たちは、オリビアの魔力を吸収し、胃酸を養分としながら急激な勢いで成長していった。

オリビアは凄まじいほどの腹痛に苛まれながら悶絶し、膨張する腹を掻き毟りながら泣き叫び、最終的には口や肛門からオークやコボルトの幼体を出産して発狂したと伝えられている。父親のゼルギウスはその様子を見て手を叩いて喜び、人目もはばからず自慰行為をおこなって射精にいたったとのことであった。

　そのような研究が平然とおこなわれているような場所が、長く安全でいられるはずがない。ある日、小さなミスが発生し、それが大きな事故に繋がって大惨事になった。設備が壊れ、警備が機能不全に陥り、研究用に捕らわれていた魔物が逃げ出し、保管されていた人造生物が脱走して研究者たちに襲いかかった。因果応報とは、まさにこのことだろう。三〇〇人を超える魔学者や錬金術師たちが殺害され、そのなかにはゼルギウスも含まれていた。彼は脱走した魔狼の群れに襲われて生きたまま貪り喰われたのだが、内臓を食いちぎられている間、呼吸が続く限りゲラゲラと笑い続けていたという。

　この事故によってベーゼッタ研究所は一夜にして廃墟と化した。アズニハン王国は軍隊を派遣して事態鎮静化に向けて動いたが、解き放たれた魔物や脱走した人造生物は想像以上に強く狂暴で、軍隊をもってしても対処できなかったのである。五千人規模の精鋭からなる部隊が三度派遣され、そのつど甚大な被害を出して退却を余儀なくされると、アズニハン王国はついにベーゼッタ研究所を放棄することを決定し、周囲三〇キロメーストル圏内を許可なく立ち入ることを禁止した封鎖領域に指定したのであった。

　ベーゼッタ研究所を失ったことはアズニハン王国にとっては痛手だった。

ベーゼッタ研究所は、十五年ほど前、アズニハン王国が属するベルザニア連合国が、宿敵であるアデルハイム王国との戦争に完敗したことに端を発する。この戦いで、ベルザニア連合国はかなり酷い軍事的損害を被ったのだ。

連合の一角を成すザウェルハン公国は、当時の大公と七万の精鋭を失い、連合筆頭国のベハン王国にいたっては、王太子サラーンをはじめ名だたる将軍たちを殺されて二〇万もの兵を失っている。アズニハン王国の損失も大きく、軍の七割を失っただけでなく、宿将ミクラーシュを筆頭とした歴戦の将軍たちを多数戦死していた。アズニハン王国はこの軍事的な損失を穴埋めするため、魔物由来の生物兵器を戦力として活用することを決め、そのための施設としてベーゼッタ研究所を設立したのであった。

　最終的な目論見としては、かつて古代世界で猛威を振るっていたとされる「神の軍団」に匹敵する軍団をつくるという野望があったが、今回の一件でそれは水泡に帰してしまった。アズニハン王国の失望は巨大だったが、しかし、天はアズニハン王国――というよりはベルザニア連合国に微笑んだ。

　宿敵であるアデルハイム王国がランバースとの戦争に敗れてから精彩を欠くようになり、内乱が勃発して内戦状態に突入した挙げ句、建国五〇〇年の記念日になぜか邪神やら古代の神々が復活して国が壊滅状態に陥ったからだ。王国の首脳陣は軒並み死亡し、王女シャルリレーゼも行方不明、死者も百万人単位で出ているということで、アデルハイム王国は事実上壊滅したとみなされている。しかも復活した神々は、なんとランバース方面へと移動して、トランジア地方に駐留していたランバース軍が壊滅的な被害をこうむったそうだ。駐屯軍の指揮官ガレアス将軍が死亡し、難攻不落のガルガンディア要塞も崩壊したそうなので、ベルザニア連合国としては笑いが止まらない。このままランバースも滅びてくれれば万々歳といったところだが、最新の情勢によると、皇帝ダリウス率いる帝国軍が攻めてきた神々を押し返したようで、事態鎮静化は近いとの見方が大勢を占めている。

　事態が終息すれば、ランバース帝国は間違いなくベルザニアに攻めてくる。そのとき、真っ先に狙われるのは、国境を接する自分たちになるだろうとの確信がアズニハンにはあった。

　というわけで、アズニハン王国は、壊滅したベーゼッタ研究所から研究資料やら実験記録やらを回収することにしたのだった。それを基盤として新たな研究施設を立ち上げるために。

　むろん、回収には危険が伴う。廃墟と化した研究所は魔物やら人造生物やらの巣窟と化しており、軍隊を派遣しても資料を取り戻すことは難しい。被害が増すばかりだろう。

　このようなとき、モノをいうのがカネである。

　トリギスティリアの冒険者たちに金銭をバラ撒き、危険な仕事をさせるのだ。前払いとして半分渡し、残りを成功報酬とすれば、場合によっては少ない金額で済む。アズニハンからすれば、百人送って十人くらいがなんらかの資料を回収してくれればそれでよかったからだ。失敗しても失われるのは金銭だけなので、軍の不満が爆発することもなく、国内から批判に晒される可能性も少ない。トリギスティリアの冒険者たちが何白人死のうと、それは彼らの実力不足のせいなので、アズニハン王国の知ったことではなかった。

　かくしてトリギスティリアに金銭がバラ撒かれ、高額な報酬につられた冒険者たちが最新のダンジョンと化したベーゼッタ研究所跡地へと赴くことになるのだが、彼らの多くにとってそれは、死地への片道切符になるのだった。

　もちろん、赴く者たちにそんなつもりはなかったであろうが。

　　　　　＊

　･･････美少女として評判だったフィアナ・サーシスが、冒険者などという危険な職業に就いた理由は、食うに困るほど貧しかったわけでも他に職の宛がなかったわけでもなく、ましてや自分の強さに自信があったからでもなかった。彼女には憧れの人物にいて、その者に少しでも近づこうとして冒険者になったのだった。

　フィアナの両親は古い時代の貨幣を取り扱うコイン商を営んでおり、トリギスティリアに店舗を構えてそこを拠点としていた。トリギスティリアは商業と経済の中心地であり、そこに出店するだけでそこそこの収入があったが、働き者の両親は国外にも顧客を抱えていてランバースやアデルハイムに出向くことが多かった。

　国外への旅路は、それなりの危険が伴う。整備された街道を進んでも、盗賊や野盗の襲撃は珍しくなかったし、魔物や猛獣に襲われることも少なくなかった。そのような危険から命と商品と金銭を守るため、護衛として冒険者を雇うことが普通だった。

　フィアナがその冒険者――ロザリー・ロスティカーナと出会ったのは、フィアナが十四歳のときだった。ロザリーはとてつもなく綺麗な女性で、出会った瞬間、その美貌と大きな乳房に圧倒されたのをいまでも鮮明に覚えている。自称二十五歳ということだったが、もっと若く見えた。たぶん、自分よりも少しだけ年上だったと思う。だが、歩んできた人生経験には雲泥の差があった。

　熟練の冒険者として数々の修羅場を潜り抜けてきたというロザリーは、ただ胸が大きいだけの美人ではなく、とてつもない強さを誇る戦いの玄人だった。魔物も野盗も襲ってくると同時に一瞬で倒し、一行には指一本触れさせなかった。その姿に、フィアナは強烈な憧れを抱いた。

　旅の道中で、フィアナはロザリーと話す機会があった。彼女は沿岸諸国の生まれで、海の向こう側にある未知の大陸を冒険するのが夢なのだという。そのためにお金を貯めて、頼れる仲間を見繕っているのだそうだ。

　その話を聞いたフィアナは、自分も冒険者になって彼女の力になりたいと強く思ったのだった。

　それから三年ほどの時が流れて、フィアナの見た目は当時のロザリーと同じくらいになった。もともと評判の美少女というだけあって、顔立ちはロザリーと同じくらい美人になった。金髪碧眼の整った顔立ちは、異性からも同性からも羨望の眼差しを向けられること数え切れず、交際や求婚を受けたことも多かった。ただ、ロザリーと違って、胸はそれほど大きくならず、平均水準を少し上回る程度だった。

　娘が冒険者になることに彼女の両親は反対した。危険な職業だからだ。両親は、娘に早く結婚してもらって幸せな家庭を築いてもらいたいと考えていたが、娘の意思は硬く、彼女は半ば家出同然で冒険者になる道を歩んだ。

　もちろん、剣や魔法や特殊な才能がなければ冒険者としてはやっていけないが、幸いなことに、フィアナには魔法の才能があった。それも戦闘魔法ではなく、重宝される治癒や解毒といった回復系統の魔法で優れた能力を発揮したのである。これはいつかロザリーの力になろうと、そちらの方面ばかり修行していたからであった。強さでは絶対にロザリーに及ばないという確信がフィアナにはあったからだ。

　フィアナはロザリーに近づこうと、彼女が所属していたギルド「炎の蜥蜴」に入団したが、そこで知らされたのは、ロザリーが三年ほど前から行方不明になっているという衝撃の事実だった。なんでも、仕事で「暗黒の大地」に向かい、それっきりだそうだ。

　フィアナは驚き、反射的にロザリーを探しに行きたいと思ったが、彼女に割り振られた最初の仕事は、他の仲間たちと共にベーゼッタ研究所跡地に向かうというものだった。なんでも、廃墟に残された資料の回収が任務だという。

　フィアナは不服だったが、ギルドに入団したからには、割り振られた仕事はこなすしかない。

「この任務が終わったら、暗黒の大地に関連したクエストを受注しよう。そしてロザリーさんを見つけるんだ！」

フィアナはそう内心で決意を固めながら、パーティーを組んだ仲間たちと共に出立した。

　彼女は知らない。これから向かうベーゼッタ研究所跡地がどれほど危険で恐ろしい場所なのか、そして暗黒の大地は、そんな危険な場所の何倍も危険な場所だということを、フィアナは知らない。無知とは、まことに大罪である。

　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。